

被災者支援室報告

九州地震被災者支援室長
司祭 マルコ 柴本 孝夫

孤立させないために

四月十四日の第一震、十六日の第二震発生後、九州教区では、教区主教をはじめ教役者・信徒が集まって話し合い、九州地震被災者支援室を立ち上げました。この時申し合わせたのが、「被災者を孤立させないために」ということでした。その後、テーマ聖句として、ロマ書の聖パウロの二つの言葉「だれが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができましよう。艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。」

「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。」を掲げることとなりました。直接顔を合わせてその思いに聴く。そして必要な支援を丁寧に行っていく。それからさらに、その信徒の周り、地域の被災者への支援を広げていく、ということでした。

これを私は「平和の同心円」作戦、あるいは「ベイ・フォワード」作戦と説明しています。平和の同心円は長崎原爆からの言葉で、地上に落とされた一発の原爆により、死の同心円が広がっていった。しかし今後私たちは、その被害の中心から平和を広げていこう、という言葉です。これになぞらえて、地震で傷ついた一人を支援することから、その輪を二重にも三重にも広げていきたい、と考えています。また「ベイ・フォワード」は、意識すれば「愛のリレー」。

一人が他の人から嬉しい気持ちにさせられたなら、それをその人にそのまま返すのではなく、複数の次の人たちに送っていく。そうすれば嬉しいことがどんどん増え広がっていく。これを支援活動にも

ボランティアの報告及び感想の抜粋

二〇一六年五月三日

報告者：小林真綾、笹 緋奈(神戸教区)

教会の近くに生まれ育っている信徒ご夫婦の家の荷物整理、主に床に散らばった本やガラスの破片を片付け、要るもの、要らない物の選別のお手伝い

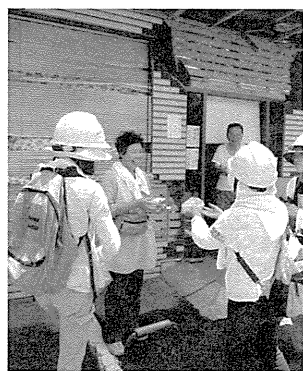


をしました。

支援物資は地域で平等に配給されますが、平等だからこそ、逆に必要なところで不足しており、不要なところでも余っている実態があるというお話がありました。

要るもの、要らない物の選別の時には「もういらんね」といって捨てておられました。が、地震が起こらなかつたら、物だつたのかなと思ひ、悔しい気持ちになりました。

また、このお宅は夜中の余震に対する恐怖から数日前まで夜は避難所で寝泊まりされてきました。やはりこのような災害が起こるとどうして、建物などの復旧作業がメインになりがちですが、同時に被災者の心のケアを欠かしてはいけないと感じました。



二〇一六年五月三十一日
報告者：日本基督教団 龍野教会 車田誠治

益城町にボランティアのメンバーと行って思ったのは、写真や映像では伝わらない被災の現実。

そんな被災地の中を、暑い中の作業に少し安らぎを与えたい飲料と、丁寧に心込めて作られたおかずを配って歩き、地域の人と関係を作り、ニーズを拾い上げ、地域の人々の懐に飛び込んで行く姿は、感心、感嘆「その手があつたか！」の思いでした。

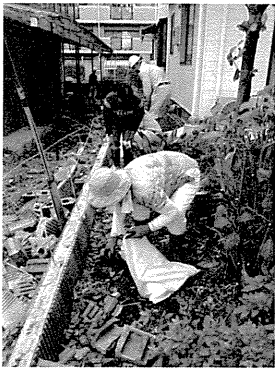
声を掛けられた人の反応も、多くの方が遠慮しつつも断らず、飲み物を受けとってくださる。話を聞いても、愚痴や批判ではなく、淡々と事実を述べ、支援を申し出ると、申し訳なさそうに「〜をしてもらえたら…」私よりも近所の〜さんの方が困っていると思うので」と、謙虚だけ

人懐っこい地域性が現れていて、たよりに感じました。

二〇一六年六月二十一日
報告者：瀬山会治

(神戸教区司祭)

昨日、頑丈なブロック塀を解体した作業の続きで、本日は大きな破片はきれいに並べ、小さな破片は土のう袋に入れて依頼者の庭に山積みして回収できるようにしました。依頼者の方は私たちの作業終了後に、肩の荷を下ろして安心されたようでした。さつと倒れたブロック塀のことがずつと気になっておられたのかもしれない。少しでもお役にたてて良かったです。



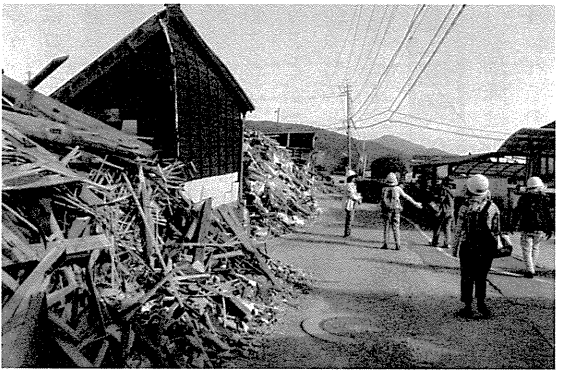
さらに昨夜の豪雨で床上浸水したご自宅の方から水で濡れて重くなった畳の搬出のご依頼があり、現場に向かいました。作業中、依頼者のご主人がボソッと「地震の次は雨、悪夢を見ているようだ」と言

われておられたのが印象的でした。

二〇一六年六月二十七日
報告者：松村 豊(東京教区)

さまざま個別に、そして山

ほどの将来への不安を持つ被災者に、私たち聖公会が大きな事は出来ません。しかし、依頼されたことを何とか成し遂げた時に依頼者は安堵の表情を見せます。私たちがやれたことは小さなことであっても、依頼者の「目の先の気がかり・今日の心の重荷」を一つだけでも取り除くことが出来たのかも知れない。安堵した依頼者は、今度は別の被災者を気遣いセンターに相談してきます。



被災地の今と今後に向けて

活動を開始するとすぐ、様々な人々から、「今、何が必要ですか?」「どう対応したらいいですか?」と次々に尋ねられました。このストリートな問いかけに容易に答えることができません。いったい今、何が必要なのか、という言葉が反芻しながら、戸惑いつつ対応してきました。それから、被災した人々にとっての「必要」とは何か? と、ずつと

考えさせられています。ある信徒のお宅を訪問した時に、よく見ると、台所の食器棚、リビングの書棚やタンスなども、その扉や引き出しの一つ一つにガムテープが斜めに貼りつけてありました。この光景は衝撃でした。「こんなふうになっているんですね」と言うと、ポツリ「まだ怖いからね」と言われました。この言葉に涙が出ました。被災地で過ごす殆どの人たちが、あの大きな揺れによる恐怖体験をし、今も心に深い傷を負っています。常々、その揺れを経験しなかった私とのギャップを痛感します。

震災三ヶ月のデータでは、今なお避難生活を送る人が四、七〇〇人、車中泊を続けている人が二一九人と伝えられています。単に帰る場所が失くなったというだけではなく、家はあっても、その屋根の下で過ごすことに、ただならぬ不安や恐怖を感じているという子どもたち、大人たちの現実があります。

私たちが見ている範囲でも、倒壊してしまった自宅を目の前にしながら、どうすることもできず、ただただ毎日周りをさまようように過ごしている人々の姿に、胸がはりさけそうになります。

被災地の「必要」はまだまだあふれています。支援室活動については先月発行の第五信にてお知らせしましたが、七月二十一日現在、九州教区内、また他教区から延べ一六八名がボランティアとして参加して下さいました。今後はブロック解体、瓦礫撤去、引っ越し手伝いといった重労働ばかりでなく、被災者と直接触れ合う傾聴ボランティア、またボランティアセンターの食事作りや清掃などの支援者も必要です。被災者へ手渡す手作りお菓子(常温保存できる物)なども大歓迎です。八月より毎週月曜日、および八月十二日(金)・十三日(土)は活動がお休みとなりますが、引き続き皆様のお祈りとご支援をよろしくお願いたします。

「忘れ去られること」が被災者にとって最も辛いことだと思います。私たちは微力ですが、病のうちにいる人、問題を抱えて窮状にある人を、いつも最も優先し訪ねられた主イエスのみ姿を思いながら、力を合わせて支援活動を継続してまいります。